50

患者の心性および「よい患者」の歴史的考察

杉田暉道

現代の医療はさまざまの問題をかかえているが、最近患者に正確に病状を知らせ、同意を得て治療を行う「インフォームド・コンセント」の問題がクローズアップされるようになってきた。これは正に「患者の権利」を主張したものであって「患者学」を指向したものといえよう。しかしてこの種の系統だった研究はほとんどなされていない。そこで演者は、患者のメンタリティ（心性）および「良い患者」の条件についていささかの歴史的考察を行った。

先ず患者のメンタリティについては、わたし達の祖先は、病気はなだめ、鎮めるものであり、病苦を癒してくれるものは神や仏であった。すなわち古代から疫病の流行のたびに疫神を鎮める祭事が行われた。しかしもとも

と特定の疫病に特定の疫神や守護神を考えていたわけではなかった。しかし江戸中期以後になると酷烈な痘瘡については特定の痘瘡の神を考えるようになり、疱瘡神をまつる「疱瘡祭」が盛んに行われた。また個人的な病気の治療には薬師信仰があった。これは仏教が伝来してから土着の神道や、民間信仰とうまく混淆して上下に浸透していった。さらに竜形に化身して苦痛を救うという地蔵や、一切の厄難を救う観音などが病気治愈の信仰にむすびつけられた。

つぎに芭蕉、一茶および良寛の生涯を深く観察した立川は次のように述べている。「彼らは病（ヤマイ）に苦しみ、怒り、怖れたが、痛苦と畏怖がなかったら、はたして彼らはより深い宇宙を垣間見ることができたであろうか。病気は生命への脅威であるとともに、非日常的な世界を発見し、より深い宇宙と対話するかけがえのないきっかけであった」と述べ、「病気はなだめ、すかし、そしてまつりあげていくものであった。そこには、病気も人間の全的存在のかけがえのない体験のひとつとする考えがあり、病気と交感し合い、病気をいわばものにする主体的な心身の

生理感覚が存在していたといえる。」と結んでいる。この考えは夏目漱石の創作活動にとって「修善寺の大患」が一つの中仕切り的な意味を持っている事実からみて明きらかである。高橋はこれを「修善寺の大患」はその意味において、真に漱石自身が躬を以って潜り抜けた生死・明暗のどんでん返しの関門であり、……それ迄の「生」に照し出された浪漫的「主我」の探究の文学から、逆に「死」をその「深い背景とする深刻な人間的『自我』の検証の文学へと大きく変貌をとげた。」と述べている。

「良い患者」の条件については、『摩訶僧祇律』巻第二十八では、一、病状に良い薬または食物を摂取する　二、看病人の言うことに従順である　三、病気は変動するものであることを知っている　四、病気の苦痛に堪えられる　五、怠け心がなく正しく療養できると五つの条件をあげ『チャラカ本集』では医療には医者、薬、看護人、患者の四本柱が具わっていなくてはいけないとし、患者の望ましい性質として、一、記憶力がよい　二、医者の命令に従順であること　三、恐怖を持たぬこと　四、病状について医者に的確に知らせる、の四つを挙げている。斧は、一、治療者に従順である　二、治療者を尊敬している　三、治療者側の規則を守る　四、自己主張をしない　五、治療者に感謝の意を示す　六、治療者側を疑わない　七、いつまでも待つ　八、うるさく聞かない　九、いつでも笑顔でいる　十、治療者に任せきる、が治療者側からみた「良い患者」であると述べている。

（神奈川県予防医学協会）